

五 意味の深みへ

前回まで、自分の置かれている世を理解しようと、文字通り勉強して考えてみた。十分了解したわけではなく、ましてどのように対処すればよいのかよく分からない。それでもこの理解を当面の参照枠として、思案し行動を選択していくことがわたしにできることである。ところが人は、歴史的な存在として在るだけではなく、ただ日々を生きる者としてあれこれ迷い悩み、哲学者が言うところの実存的問いを抱く。蝶の夢の中の男には漠然としか意識できないが、よそ行きの言葉で表現すれば、人生の意味というようなことだろう。すでに頭脳明晰な人たちが人生に決定した価値はない、と言っているらしい。だが、夢見る蝶は夢の解釈を求める。

というわけで、粗末な神経網が何か意味をむすぶ回路をあてもなく探すことになる。このあいだは、表題に誘われて『意味の深みへ』という書物の行間をさまよった。著者は、井筒俊彦という二十世紀の日本の哲学者である。以前に『意識と本質』という書物を読んで自前の思想だと思ったので、最近復刻された『意味の深みへ』をとりよせたのだ。『意

識と本質』ほどの容量をもつ体系的な論考ではないが、エッセイ風な小論集がかえってこの人の信念をよく教えてくれた。わたしは以前の認識を改めることになった。

井筒という人は、イスラーム学からさらに西アジアに起源をもつ三つの宗教思想を把握した上で、莊子・老子の学と仏教哲学にまで思索を広げて独自の東洋哲学をつくり上げた。それは単なる東洋思想ではなく、ポスト構造主義までの西洋哲学をも踏まえた大きな構想としてある。ヘブライ語・アラビア語・ギリシア語など驚くほど多くの言語を習得した碩学にしてはじめてできた仕事である。蝶にはそれを語る力がないが、話を進めるのに少し触れないわけにはいくまい。中心軸にすえた考え方は大乘仏教の「唯識論」である。感覚から無意識までの多層の「識」が、人の表象をつくり認識に至る働きをするのであつて、諸存在はこの識に包摂されるとする。「色即是空」の言葉に代表される「空」の思想を、「唯識」というダイナミズムに発展させたものだ。碩学は、最深層の識である「アラヤ識」を言語論の場に移して、「言語アラヤ識」から意味の分節が生起するプロセスを論じて、存在の本質に迫ろうとする。『意識と本質』を一読したわたしは、その哲学が、言語論・認識論・存在論などを全体的に論じる現代的なもので、複雑きわまる世界の理解へ一つの接近法を与える、と受けとめていた。議論がメタフィジカル(形而上学的)なことは判っていたが、方法としてそういう議論の仕方をしていと思ったのである。

ところが今回、その理解はわたしの浅い読みのせいだったことに気づいた。『意味の深みへ』で著者は、限定句なしに、「存在はコトバである」や「コトバがものを生み出す、コトバから存在世界が現出する」と断言する。究極において著者は、「もの」の实在を解消してそこで論じている神秘主義の立場に移行しているのだ。フィジックス(物理学)の研究にたずさわったことのあるわたしは、その立場に同調できない。大学者の到達した意味の深みだが、そこから離脱しようと思う。

後退することになるけれども、存在の根源、人間がなぜ存在するかといった問いの追求に限界を置いて、世界を理性的に考察することだけが人間にできるのだと考えよう。それがカントを正しく継承する立場だと思う。言葉あるいは論理を探索したラッセルは井筒のようには考えなかった。彼の弟子ともいうべきウィトゲンシュタインは「哲学は言葉の「アヤである」とは言ったが、コトバを存在の基底に置かなかった。「意味の深み」を思索することは意義あることだが、カント以来の善知識の立場からすれば、自分を経験的世界の外にまで連れ出してはいけないのだと思う。

そう思って読むと、批判が可能だという考えが浮かんできた。井筒は宗教的神秘主義に共感する一方で、チョムスキーの考えをわずか三行で片づける。しかし、意味体系は網目

の結節点である言葉よりも相互関係の構成によって築かれていくと現代風に論じている個所があるから、意味を分節するプロセスでは言葉よりも関係性が重要だと言える。つまり、意味は関係性によってつくられると立論できる。すると、それは井筒が排除しようとする論理性・ロゴス性への注目に導く。チョムスキーの「生成文法」はそういう関係性が人間の中に生成するメカニズムを探ろうとしているのだから、三行で片づけてはいけなйдらう。わたしは、文法生成の能力が人間に備わっているとするとチョムスキーの「実在的」な考えの方を採りたい。存在をコトバの形而上学に収納することなく、意味分節論を言葉の位相で存在を解釈する方法にとどめる「唯物論」の立場に立ちたい。

形而上学の歴史は古く実に連綿と続いて、わたしの中にもその傾向はある。だが、よき中庸の立場を保つラッセルは、人間の歴史の一側面として、科学がゆるやかに神秘主義の領分を埋めてきたことを述べる。この悠々とした姿勢を尊重すべきだろう。意識ということに関して言えば、フロイトが無意識を再発見した頃から、精神分析や心理学が新しいテーマとして登場した。しかし、蝶の夢の中の男は夢判断のような議論は行き過ぎだと言う。脳や神経回路などの実証的な研究がそういうテーマの外枠を徐々に明らかにしつつある。それらの成果をとり入れてしかも性急にならずに思索すべきだと思う。科学的な思考法を訓練した現代人の中から、人間に関係することがらに新しい視点を提供する構想が生まれ

ている。「サイバネティクス」や「生成文法」はそういう構想だと思う。そういう環境の中で言語論と意味の考察は進展しているだろう。人間の認識もきわめてゆるやかだとしても深まっていけばいい。

以上のわたしの考察は、自然科学がモノとコトから成るこの世界をしだいに精緻に説明するようになってきたことに影響されている。現代物理学によれば、モノを運動変化する仕方で切り離して考えることはできない。モノとコトは不可分の事象として時間・空間に立ち現われるのである。切り離すことのできない時間を考えれば、不変のモノを取り出すことはできない。この世界では、モノやコトが孤立して在るのを捉えることはできず、かならずコトを起こすモノを検知して事象が認識される。その上、モノはほかのモノと相互作用して関係をむすぶ。だから、実在という言葉は変転するモノとコトの事象の全体を指す。先ほど使った実在的や唯物論という言葉は、そういう考えを踏まえている。自然科学的な見方を超えた哲学的議論でも、E・カッシーラーの『認識問題』が「存在はコトバである」のような考え方を退けている。…だが、これ以上危うい思索はやめにしよう。

ひるがえって、井筒の意味の探求には、名もない蝶の批判にかかわらず意味あるものがある。人がおちついて日常の生活を反省しなにかでも意味を生み出そうとするなら、

暮している世間の慣習など自分を自動化して動かす作用を明るみに出して、根本的に考えなおすことは有益な姿勢だ。昔から修行者が目指したのはそういうことなのだろう。その中でたしかに人の生き方を変えるほど意味ある見解が生み出された、と考えてよい。だが、現代人は神秘主義の深みに落ちこまずにそうしなければならぬ。そもそも原始仏典のガウタマ・シッダールタの教説に神秘主義はなく実に素朴なものだった。ソクラテスは問い続けることで人間精神を意味あるものに保った。それがあの人を今でも尊敬させるのだ。井筒が参照した蝶の莊周も、神秘主義の手前で思索してほかの人の気づかない意味を発見したように見える。宗教人である道元の『正法眼蔵』の議論の仕方でもまた神秘主義ではないと思う。世界を捉えなおすそれらの深い思索の中から価値ある生き方がつくり出されると信じてよいと思う。

結局、まだ意味をめぐる問いの入口にいるにすぎない。蝶が見ている夢の意味、あるいは夢の中の男が相対している世界と自己の意味を尋ねる問いは残ったままになった。しかし、そうだとすると、明日もまた問い続けることを願いながら眠りに就こう。